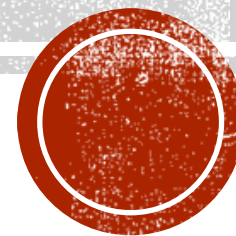


<https://www.youtube.com/watch?v=EtuDJ2WGQyI>

東日流外三郡誌の考古学

「和田家文書」 令和の再調査

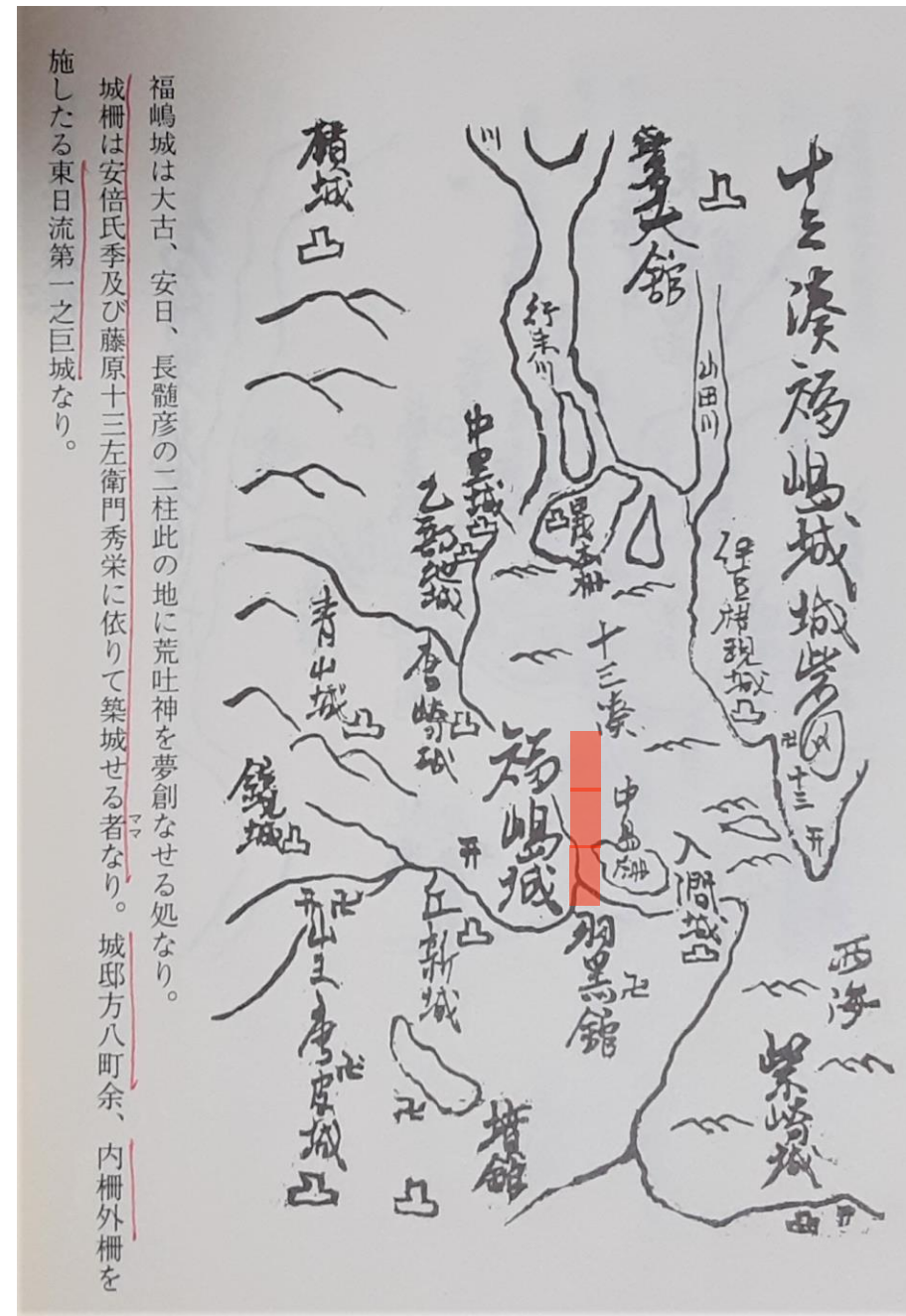
YouTube講演は、表題をクリックしてご覧になれます



令和5年(2023)5月20日
古賀達也(古田史学の会)



福島城内郭の門跡(復元)



福島城築造年代の一致

東北地方北部最大の城館遺跡として知られる福島城跡(青森県五所川原市)は、昭和三〇年(1955)に行われた東京大学東洋文化研究所による発掘調査の結果、築造年代は安藤氏の城という所伝から南北朝～室町の頃(十四～十五世紀)のものとされた。

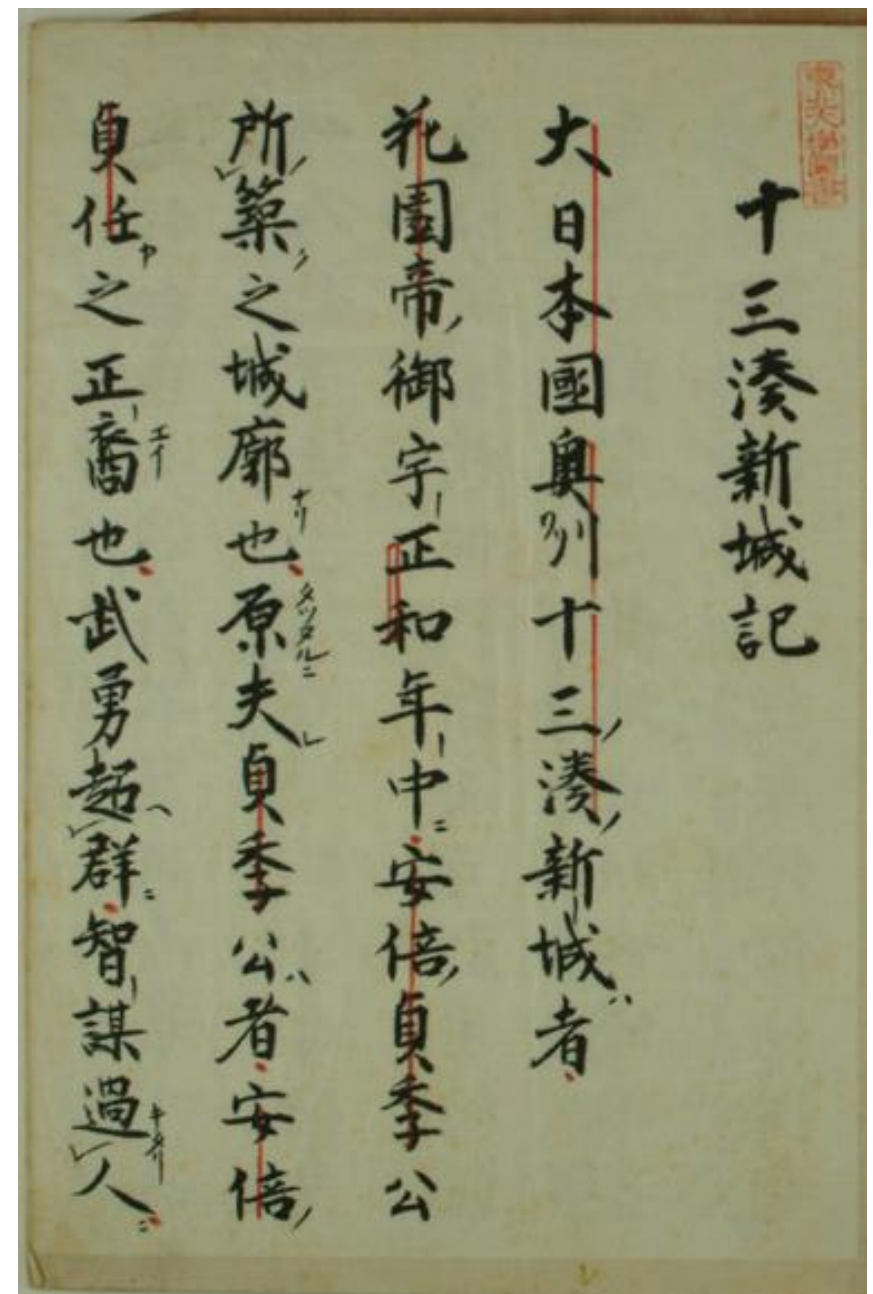
秋田家で発見された『十三湊新城記』の記事を根拠に正和年中(1312～1316)の築城とする説も出されていた。ところが、1991年より三ヶ年計画で富山大学考古学研究所と国立歴史民俗博物館により発掘調査がなされ、福島城遺跡は平安後期十一世紀まで遡ることが明らかとなった。そして『東日流外三郡誌』には福島城の築城は承保元年(1074)と記されており、通説とは異なっていた。

「**福島城** 別称視浦館 城領半里四方 城棟五十七(中略) **承保甲寅元年築城**」
『東日流外三郡誌』北方新社版第三卷、「四城之覚書」

発掘調査により通説が覆り、考古学的新知見と『東日流外三郡誌』が一致し、偽作説の成立は困難となった。

「東日流外三郡誌」に記された**福島城**の変遷

- 「**稲城**代（福島城ノ創）
一代東日流長髓彦 二代長鏡彦（中略）五十五世阿部連（五畿内に趣〔赴力〕く）
- 「**唐人館**（福島城次代）
（中略）**稲城**取潰築**唐人館** 第一世物部連 二世阿曾部 三世阿部宗頼（後略）」
- 「**高館**（**唐人館**改名）
（中略）**高館**取潰築**視浦城**為建固巡濠柵鯁崎鮎内川唐崎川之内一円為城郭（後略）」
- 「**福島城** 別称**視浦館** 城領半里四方 城棟五十七
（中略）承保甲寅元年（**1074**）築城」
- 「**視浦城**累代
十三左衛門秀栄 = 秀元 = 秀直氏（後略）」
- 「**福島城**（**視浦城**改）
安東貞季 = 秀任 = 友季 = （中略）= 盛季」
※この安東貞季が『十三湊新城記』の安倍貞季ではないか。



秋田家から発見された『十三湊新城記』



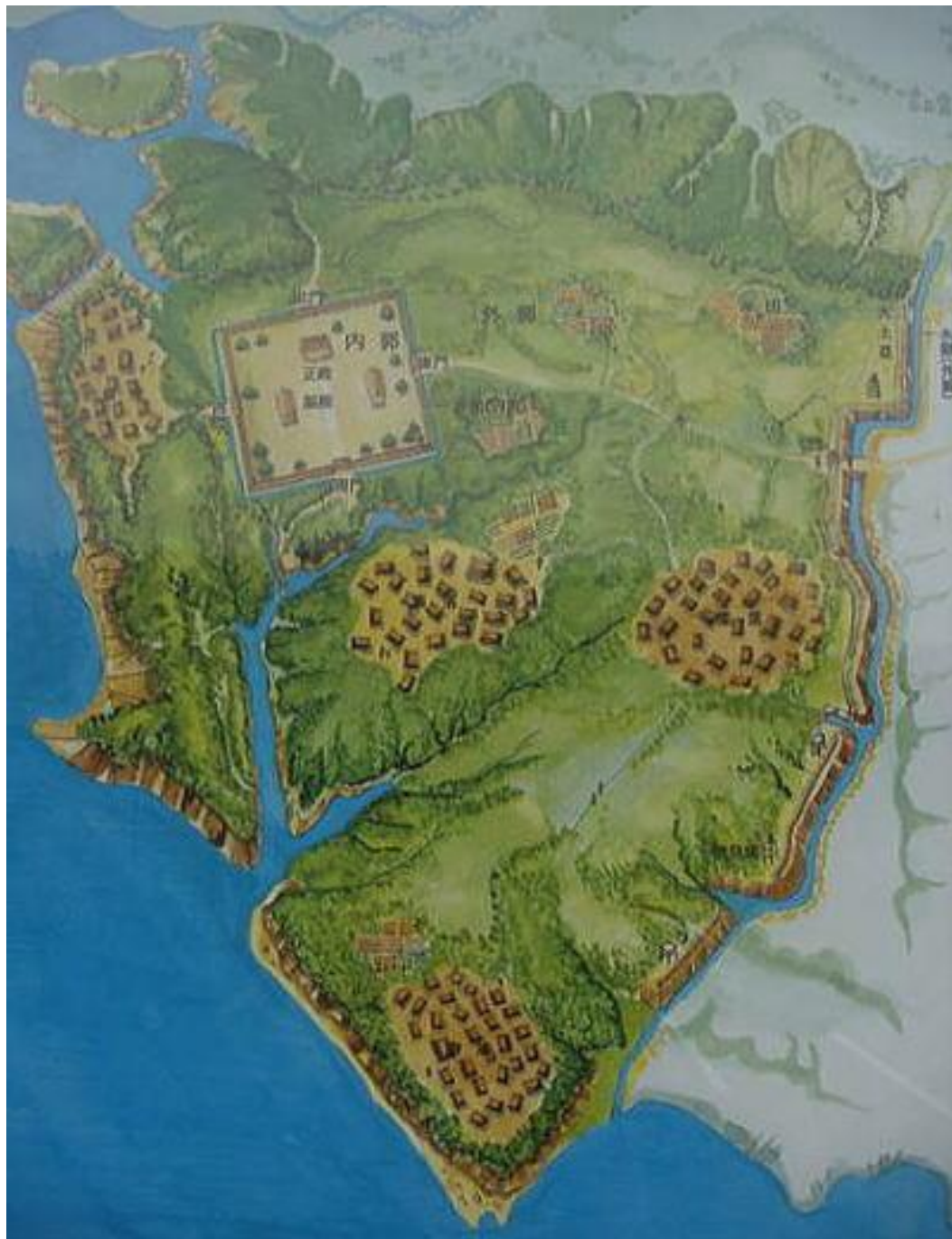
福島城跡全景

福島城の内郭は一辺が180m四方の方形、外郭は一辺が約1kmの三角形。



写真1 福島城跡
(1992年3月撮影)





福島城明細図

水堀

北砦

中島砦

西砦

船泊

本城

馬政野

南砦

相内川

東砦

大倉

中蔵

砦

宇東氏

砦

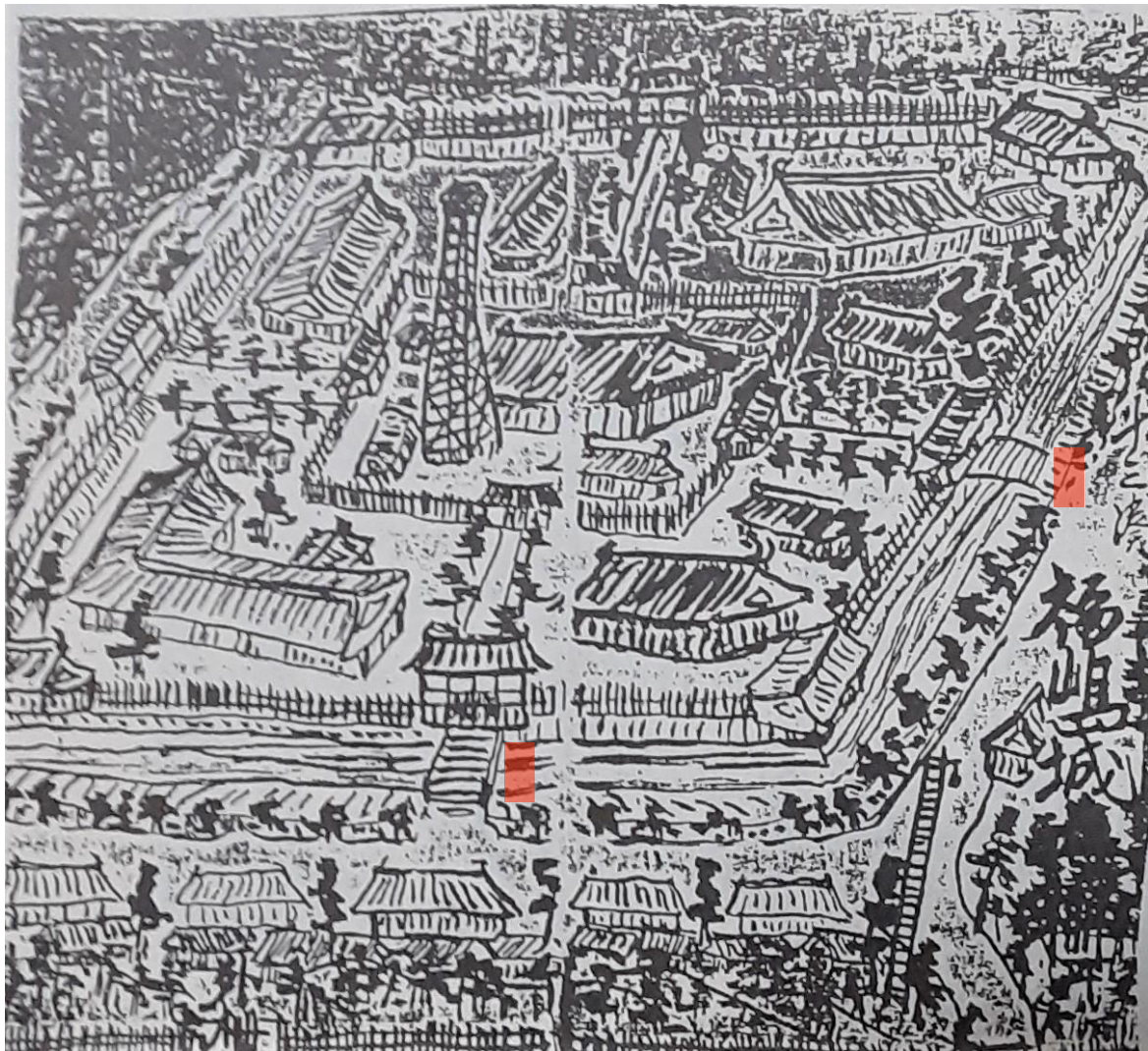
『東日流外三郡誌 3』 p.322



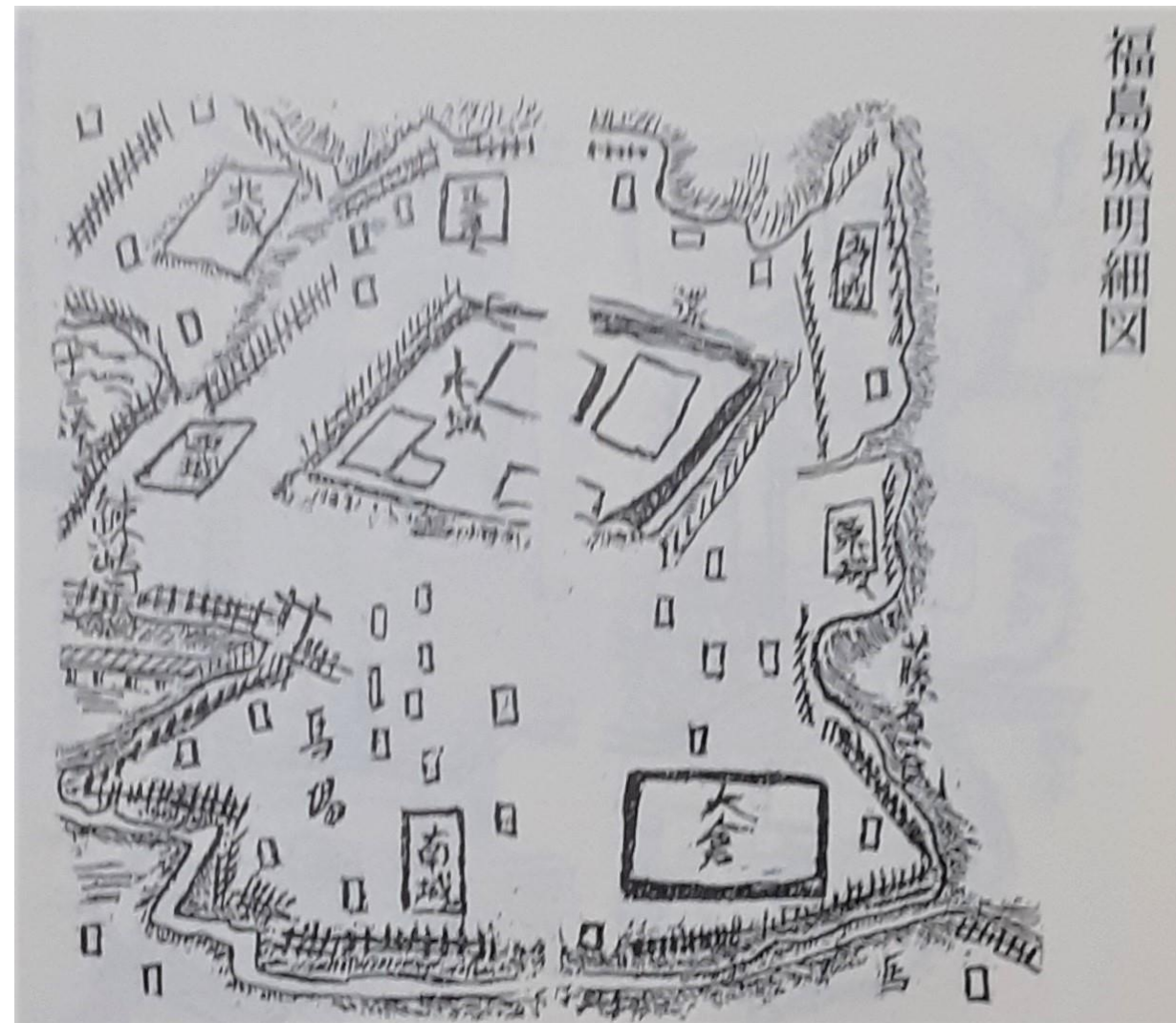
今回調査した**福島城**遺跡は十三湖北岸にあって、中山山脈から派生した東西に長くのびる標高20m弱の丘陵端部に位置する。福島城は、自然地形を利用し、さらに土塁と堀によって囲まれた一辺約1kmの三角形をなし、総面積は約625,000m²の規模を持つ城郭遺跡である。また、内部には一辺200m弱の**土塁と堀**を持った**方形の区画（内郭）**も存在している。

『福島城跡 平成6年度実取地区農道整備事業にかかわる緊急発掘調査報告書』
平成七年(1995)発行 市浦村教育委員会





福島城図 『東日流外三郡誌 3』 p.337



福島城明細図 『東日流外三郡誌 3』 p.321

平成7年(1995)の発掘調査により明らかとなった福島城の内郭の様相（土塁と堀を持つ方形区画）が「東日流外三郡誌」の記述と一致している。これも偽作説を否定する史料事実だ。



国立歴史民俗博物館による調査（1991～1993年）

国立歴史民俗博物館では、「北部日本における文化交流」をテーマとして、十三湊遺跡、福島城を取り上げ、調査を行っている。(中略)ここでは調査概報〔千田ほか1993〕〔国立歴史民俗博物館1994〕に従って、福島城の調査成果について述べる。

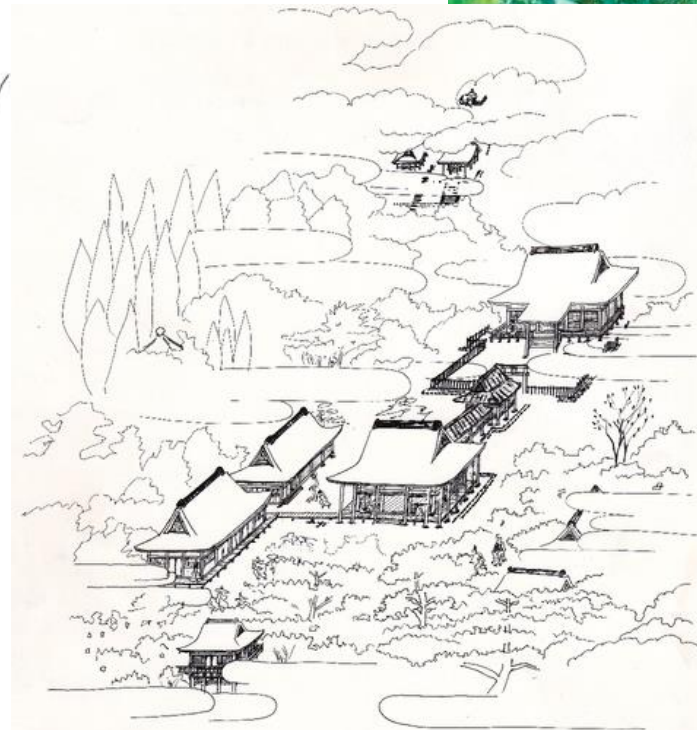
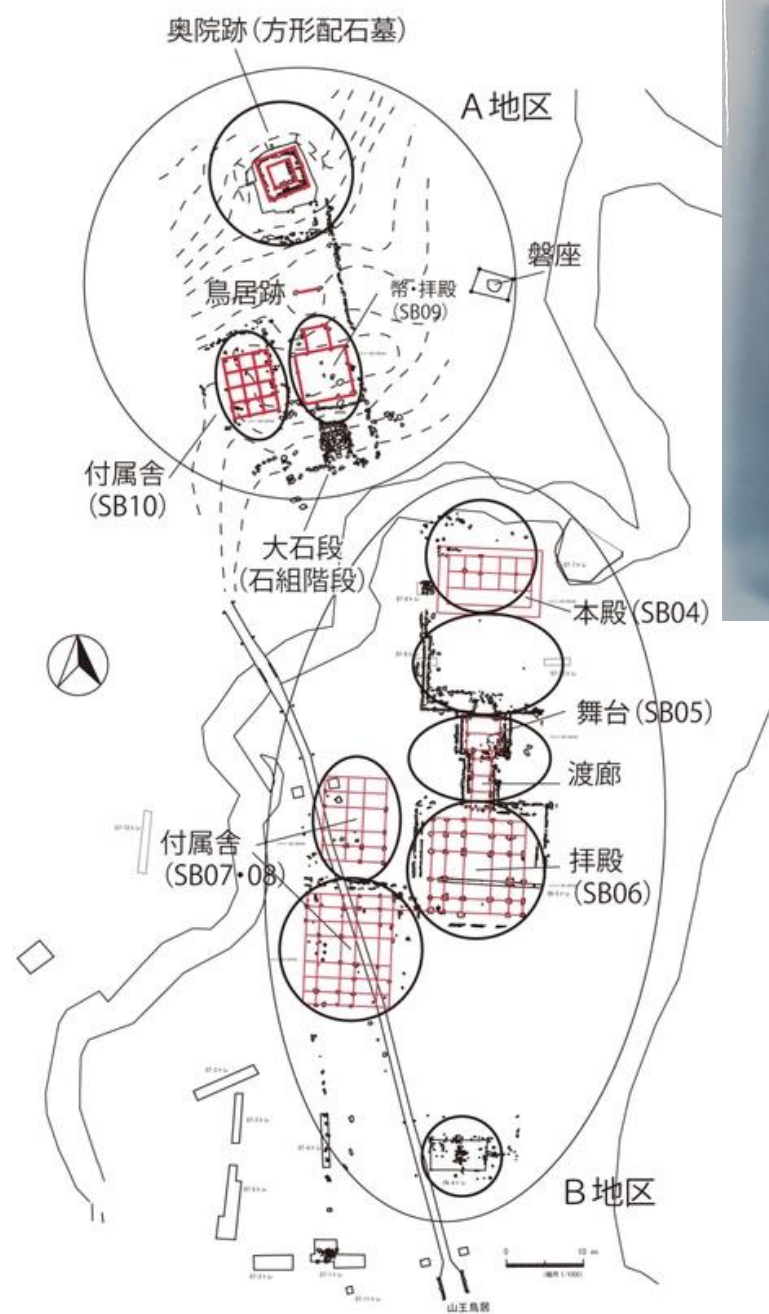
福島城は、中世城館の実体が明らかになりつつある現在、**中世城館としてはあまりに異質**で、むしろ**古代の城柵に類似する構造**をもつ。しかし、文献上では古代城柵の存在は知られておらず、その性格が問題となる。また、従来の所伝のように中世安藤氏の城館であるとすれば、中世城館の概念自体の再検討に迫られるとして問題を提起している。

そこで、91年度では福島城の遺跡の全体像と現状を把握するため、地形測量による基本図面の作成と福島城周辺における分布調査が行われている。分布調査の結果、福島城の「内郭」では(中略)**中世遺物は全く採取されていない**。

92年度調査では(中略)築造年代と構造を探る調査を行っている。それによると、土塁は丁寧に粘土を積み上げていること。また、**内郭東側**では**土塁**の内側に幅2mの**溝跡**、**門跡**と考えられる**柱穴**が検出され、さらに溝内から**10～11世紀代の土師器片**が出土している。

以上の調査成果から、福島城全体に比して発掘調査面積は少なく結論は出せないとしながらも、福島城は中世の城郭と考えるよりも、近年の考古学的成果によって、東北北部・道南地方にかけて分布することが明らかとなってきた**防御性集落（10～11世紀代）**とのかかわりが強いと指摘している。





山王日吉神社

五所川原市 (旧市浦村)



山王坊発掘調査と一致

『東日流外三郡誌』と考古学的出土事実との一致については、早くから指摘されていた。例えば、福島城の北方にある山王坊遺跡(現日吉神社を含む一帯)。坂田孝氏は「津軽山王坊における日吉神社の建築において、昭和五七、五九年における発掘調査結果と『東日流外三郡誌』に記された山王坊絵図が一致すると述べている。

「調査により大石段が現実のものとして三図(『東日流外三郡誌』所収の三枚の絵図。ABC図)と同じ形式で出現した。」

「このC図の神社周辺の描写は調査により判明した拝殿跡と西側小石段跡と、現在の参道との関係に近似している。この大石階の中央に、巨大な老杉の切株が残存していた。これは樹齢約三〇〇年とされ、伐採は日露戦争当時であるから、逆算すると約四〇〇年前にこの大石階は地下に埋没して人の目から隠されたことになる」※()内は古賀。

このように、昭和五七、五九年の発掘調査により、四百年ぶりに明らかとなった山王坊跡の配置が『東日流外三郡誌』の絵図と一致している。

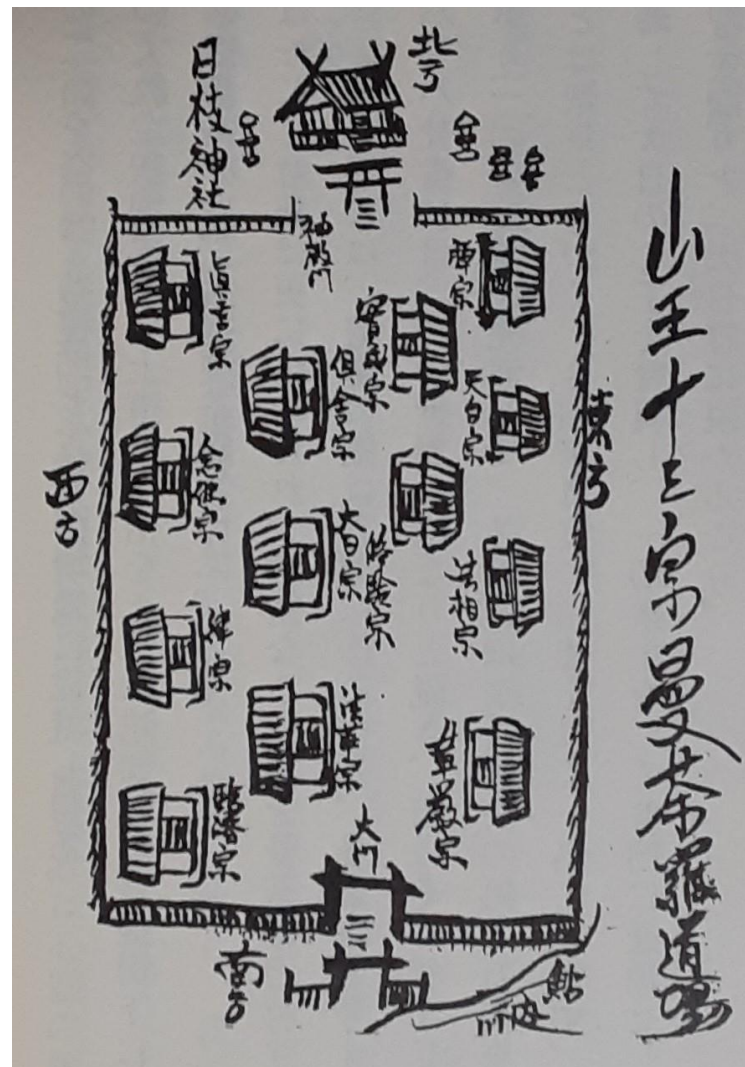
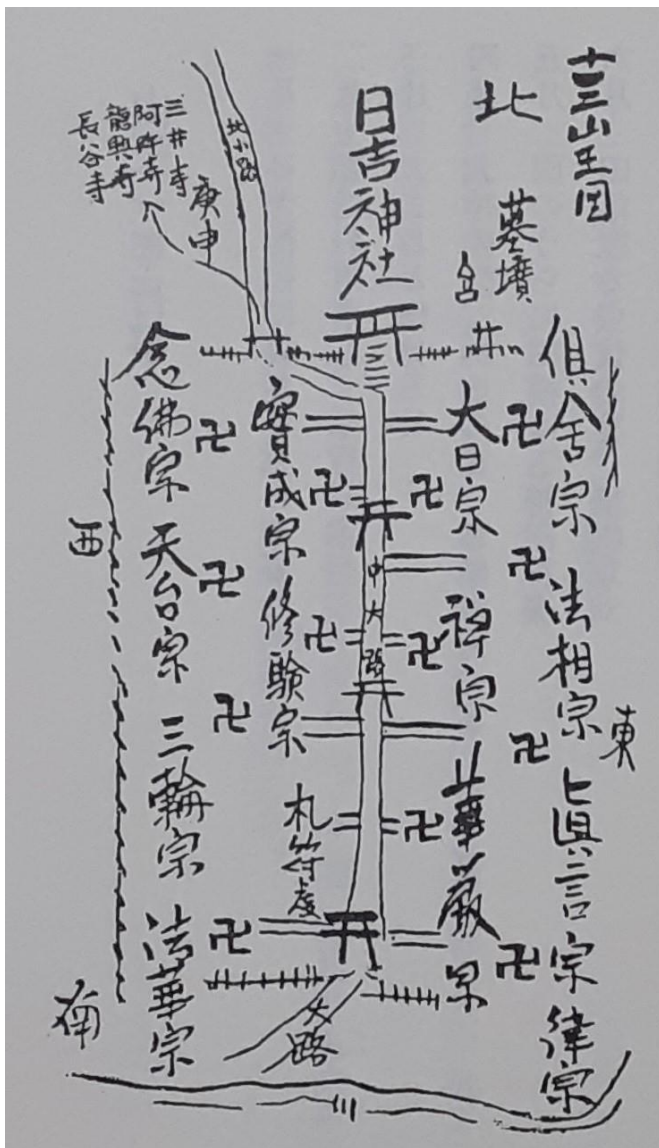




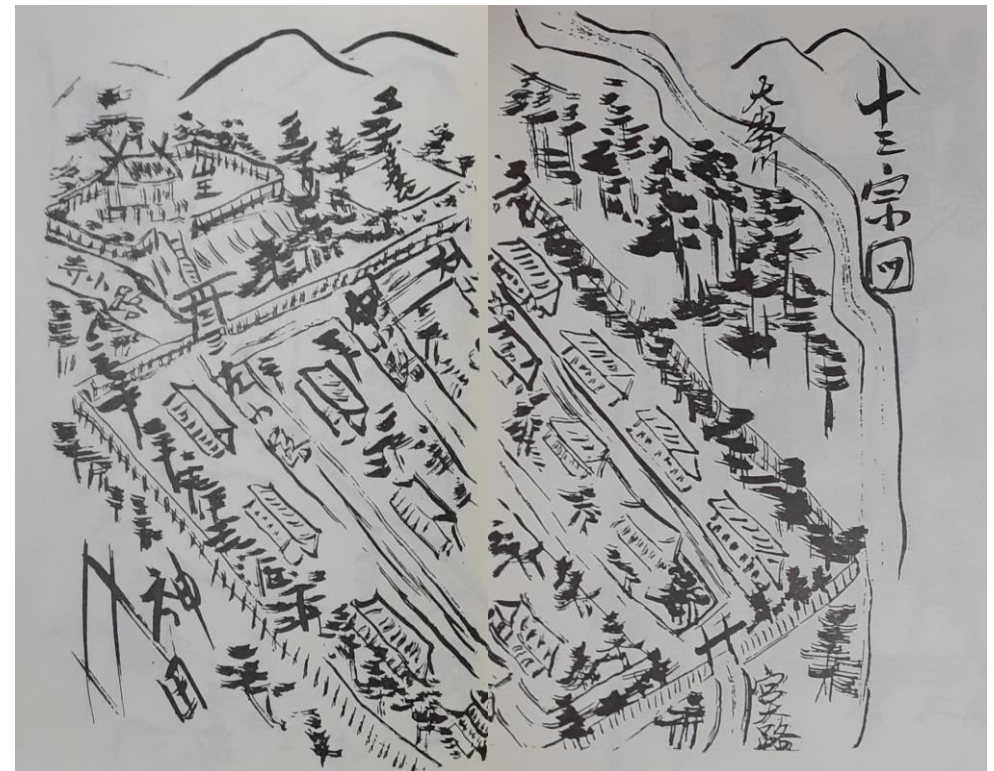
写真9 山王坊日吉神社 奥院正面 大石段

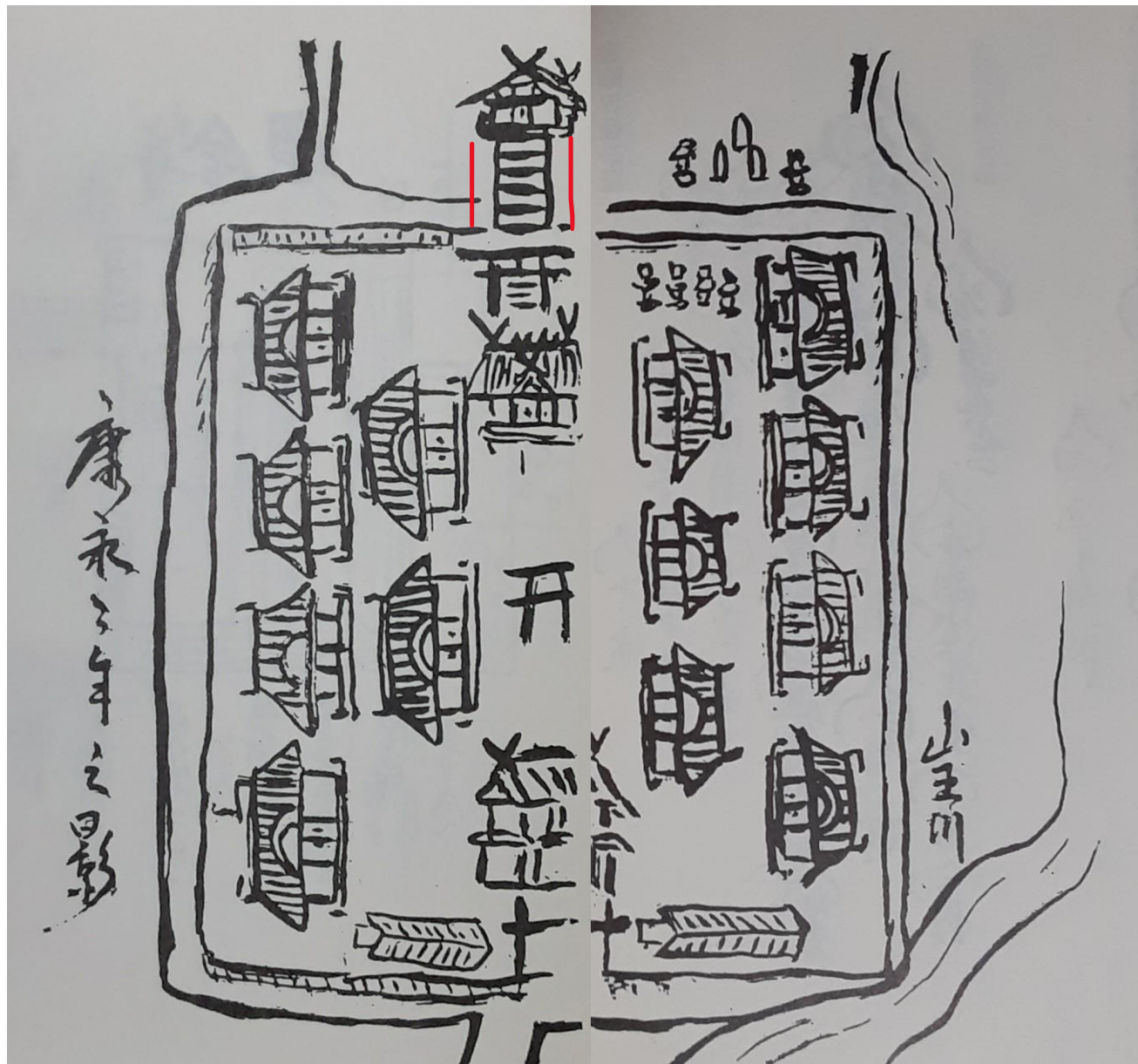
五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第31集
山王坊遺跡 平成18～21年度発掘調査報告書 2010年



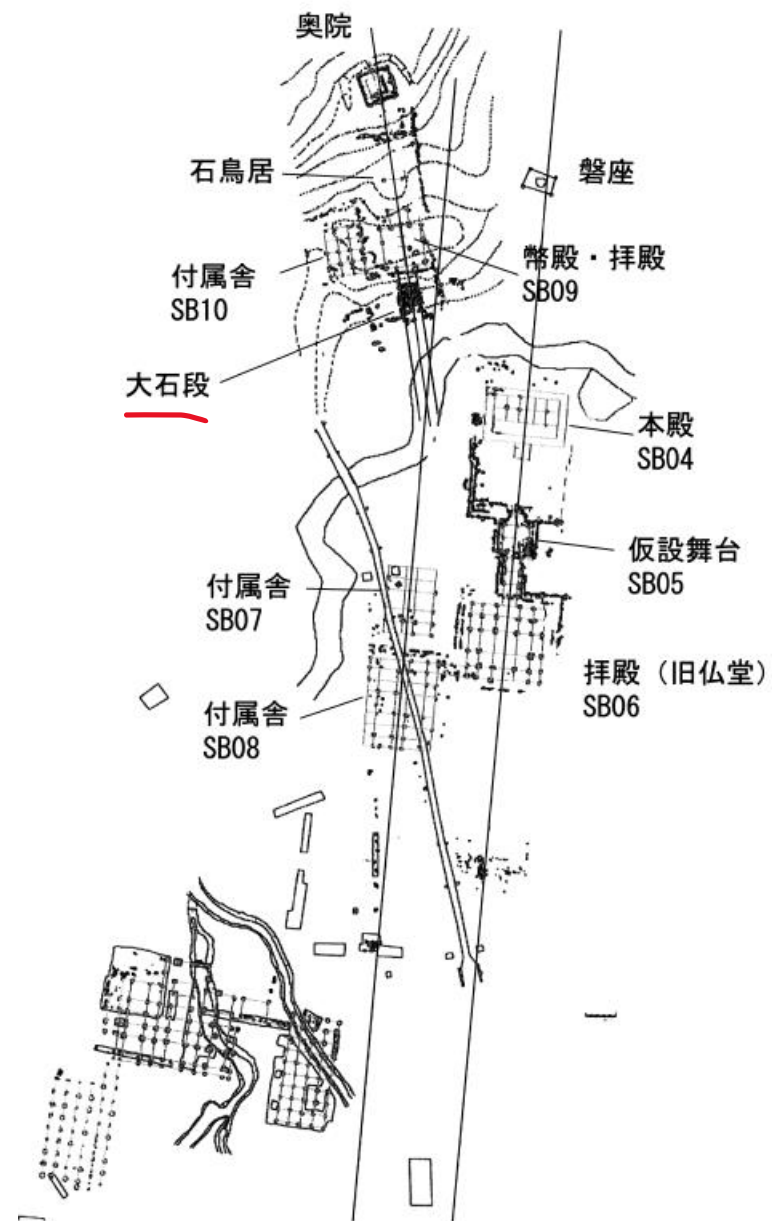


『東日流外三郡誌』八幡書店第
4卷 信仰篇 《明治写本》





『東日流外三郡誌』 4 信仰篇 八幡書店版



第56図 山王坊日吉神社（山王宮）配置図

五所川原市埋蔵文化財調査報告書第31集
山王坊遺跡 平成18～21年度発掘調査報告書 2010年

「東日流外三郡誌」、新野直吉氏の証言

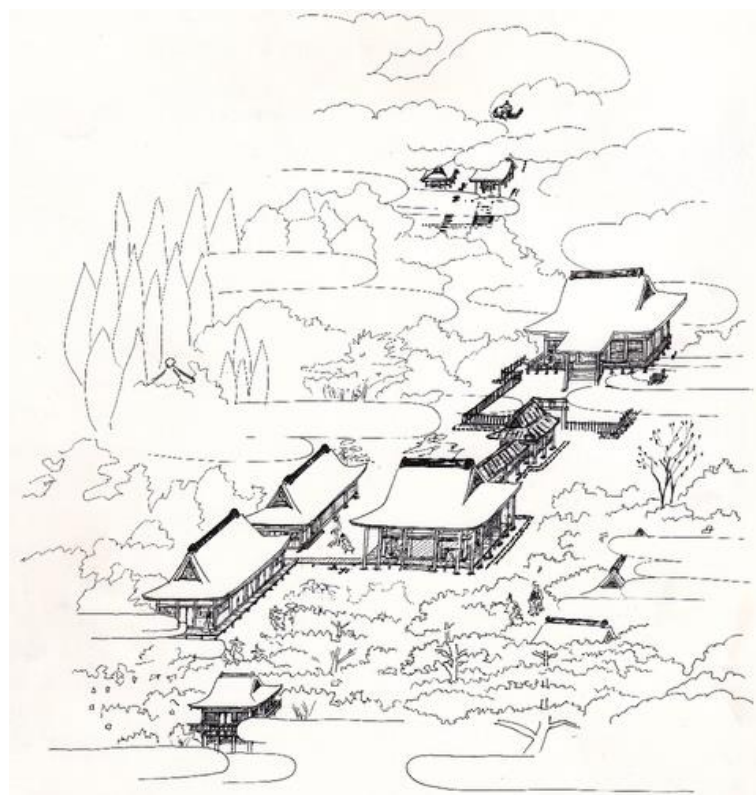
それでは山王坊をどうして掘ろうとしたかという事ではありますが、山王坊の事について『東日流外三郡誌』という、この村の村史の中に活字化された資料がありまして、その中に山王坊の事が出ております。それから山王坊という地名が先ずあるわけですから、山王坊というからには山王さんである事は明らかであり、しかもあそこに山王鳥居がちゃんとあって現実に山王さん一日吉神社—が祀られているわけで、あの地域に昔の山王さんの何らかの遺跡があるのではないか、という事は誰でも考える事ができるわけであります。

最初にあそこを発掘する事を、**昭和五十七年(1982)**に決める前には、実は檜山のある遺跡を発掘しようかという事も考えたのでありますが、そちらの方はある意味でここが〇〇のお寺の跡であるという事が史跡的に明確になっていました。いつでも掘れば明らかになるというか、どういった寺院の跡であるかは、ほぼ推察がつかしました。ところが、山王坊の方は今言ったように神社はある。地名もある。それから**市浦の村史の資料**の中にも関係した記述がある、という事はあるけれども本当は**学問的にはその事を誰も立証した事がない**わけでありまして。そしてまた、わからないわけでありまして。



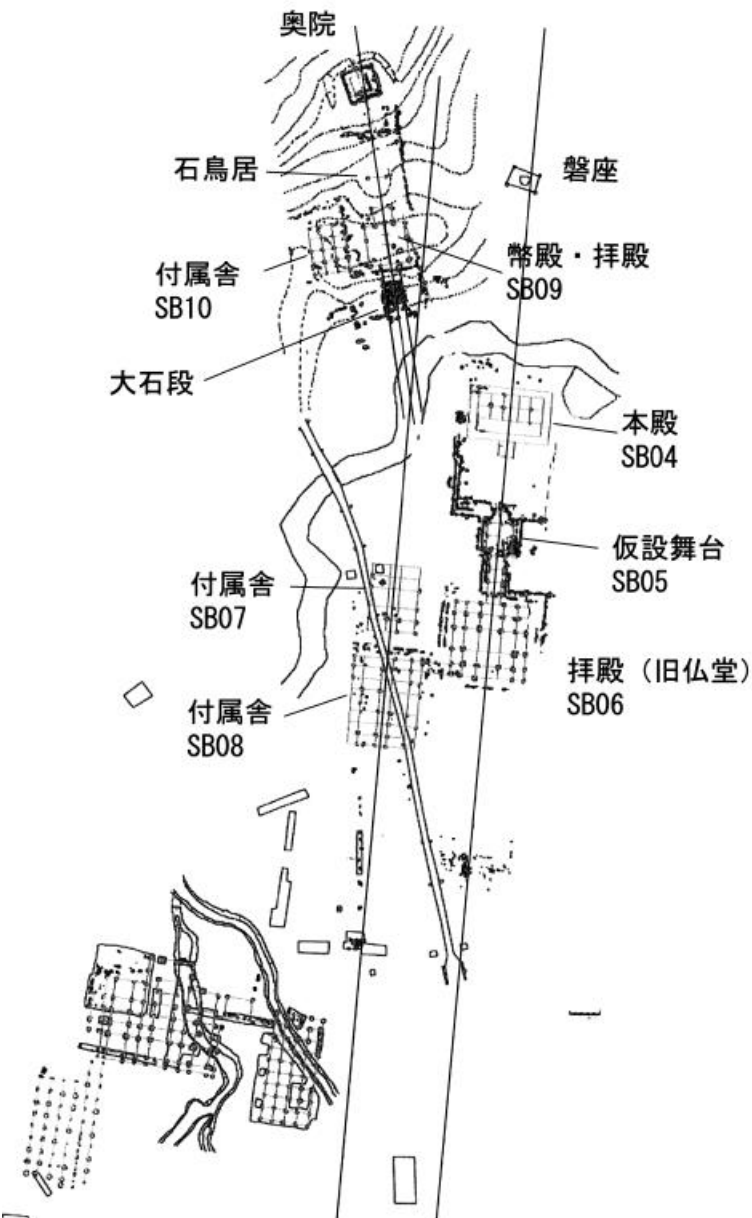
現実には豊島先生はじめ土地の方々のご承知のように、上の方の階段—要するに階(きざはし)—から上の方の部分には、当時既に石組等が露出していましたので、この土地ではここに何らかの遺跡があるんだという事は伝承されていたと考えられます。(中略)

現在の状況ではですね、展示されている**坂田さんの描いた絵**でもお分かりのように**二列に並んだ日吉神社の社殿跡**と考えられるものが検出されています。そして別に言えば、あのスペースには**外三郡誌**という資料の中に出ていたような**十三宗寺**というようなお寺の伽藍が稠密に並んでいた可能性はあれだけではありません。もしそういうものがどうしても存在するとするならば、それはあの**山王坊の林の前面に連なっている田圃の中にあるかも知れませんが**、その可能性は中世的建物の礎石ですから今までの耕作でいっぺんも当たっていないとするならば、**無いんだと思います**。思いますと言うので、断定しているわけではありません。従って私はまた今度、じゃ一体あの**東日流外三郡誌**に書いてある**十三宗寺**というようなもの—十三千坊というようなものになるんですね—そのようなものが本当にあったのかどうか。どうも、もしああいうものが近世以前からああいう絵のようなものの原図になるものが伝わっていたとするならば、**「単なる宗教的な曼荼羅」**だと、(後略)

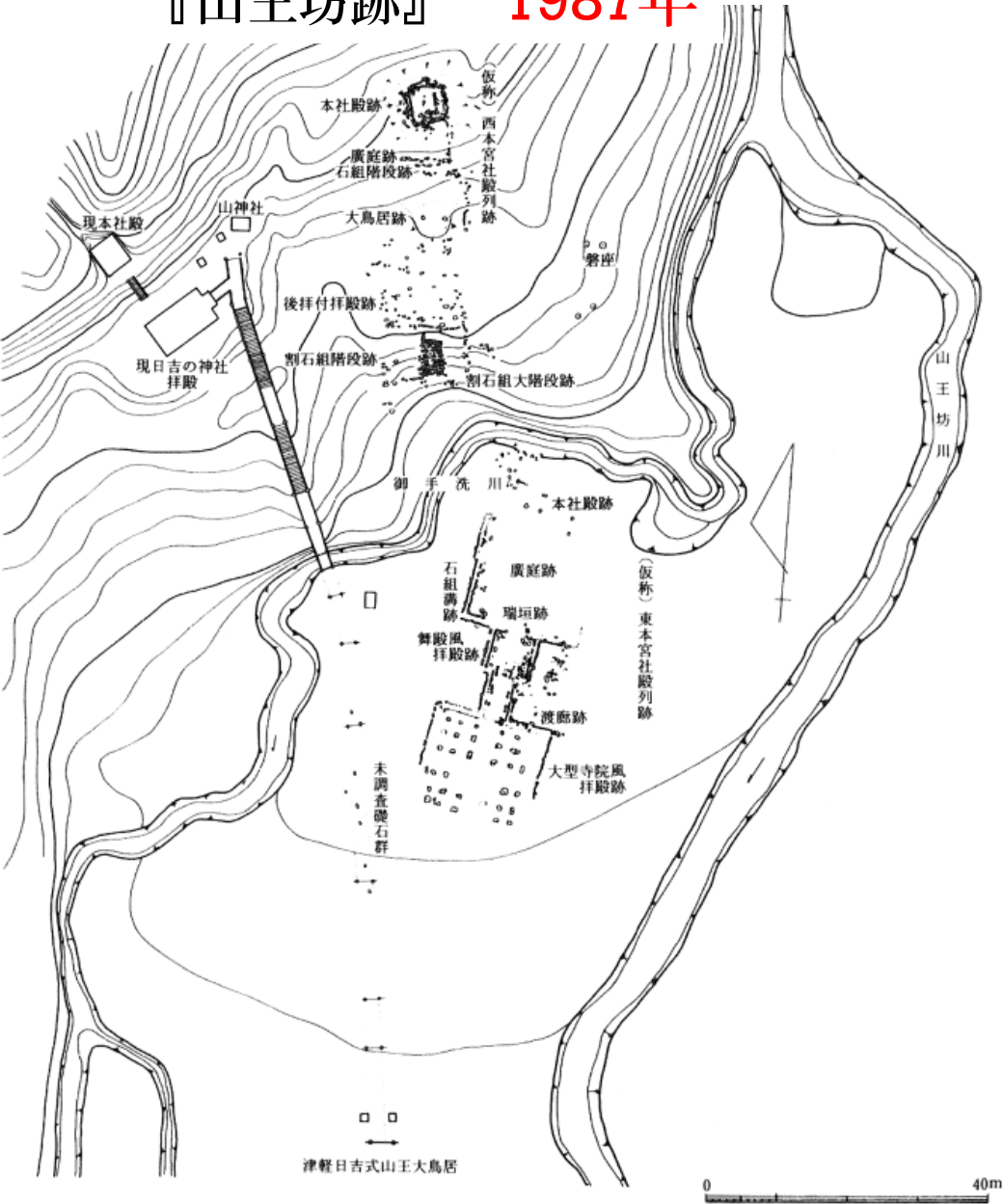


『安倍・安東氏シンポジウム(記録)』
平成元年八月に市浦村で開催されたシンポジウムの記録冊子





第 56 図 山王坊日吉神社（山王宮）配置図



第 1 図 山王坊跡平面図（『山王坊跡』1987 より）

「東日流外三郡誌」 八十六巻口本

第一章〔山王十三日記〕

(前略)

山王社殿建立 選地福島城 以鬼門封 定現在靈地 (以下略)

〈読み下し文〉

山王社殿建立の選地には、福島城の鬼門封じを以て現在の
靈地を定めた。

『東日流外三郡誌』 4 信仰篇 651頁 八幡書店版





第 60 図 遺跡方位真北關係



垂柳遺跡は、青森県南津軽郡田舎館村にある弥生時代中期(2100～2000年前)の遺跡。

656面の水田跡が検出され、それまで東北地方北部における弥生時代の水田稲作は否定的であったが、**津軽平野のみ**であるが稲作をはじめとする弥生文化が受容されていた可能性が濃くなった。



垂柳水田遺跡



砂沢遺跡

砂沢遺跡は、青森県弘前市三和にある弥生時代前期(2400～2300年前)の**本州最北端最古の水田跡遺跡**。

北部九州を起源とする遠賀川系土器が出土しており、九州北部の稲作農耕が、日本海沿岸を經由して津軽平野へ伝播してきたことが分かった。



天孫降臨の時代(弥生前期末～中期初頭)、稲作が北部九州から津軽に
伝播している。この伝承が「東日流外三郡誌」に記されている。

葦原談儀

(中略)

日の国より**築紫**を侵領せし一族は**日向一族**と称し、農を営み長き年月を経
して、遂に築紫の国を掌中に治し、土民より活神の坐に崇められたり。(中略)
やがて、日本国の中央なる耶馬台国をめざして兵を挙げせり。

時に耶馬台国には、**安日彦**、**長髓彦**が五畿七道に君臨して日向一族の侵領
に応戦せり。(中略)

依て、安日彦は深傷なる弟長髓彦を護り乍ら、山を越へ谷を渡り、一族の
者を俱に北に落忍びて**東日流**に来るや、広莫たる津軽の葦原を眼にするや、
これぞまさしく日本中央にして吾が新しき国土を起さんとして、農を以て拓せ
り。(中略)**東日流**の平野は**田畑**のみらるゝに至るは**この頃**なり。

稲作は**ホコネ**と曰ふ**稲穂**なり。遠く韓国より来る種なり。この稲は寒きに
強く亦寒冷の水にも強き故に東日流またゝくまに拓田の盛んならしむる兆と
なれり。(後略)

寛政五年(1793)二月七日 秋田孝季

《八幡書店『東日流外三郡誌1』439～441頁》



安倍大觀記

奥州に下向せし**長髓彦**、**安日彦**の一族は**日向族**に故地を奪取侵領されたるや北落し、安住地を求めたり。(中略)

依りて一族は日本の国末**奥州東日流安東浦**に到りて安住し、一族を荒吐族と称して**長髓彦**及び**安日彦**、**巖鬼川**を**東西**に堺を定めて、各々**君臨**せり。

これぞ安倍一族の創世也。

延文二年(1357) 会津加茂神社 宮司大和介書
右書は漢文也、現は会津神明宮に蔵す。

寛政五年(1793)

秋田孝季

《八幡書店『東日流外三郡誌1』452頁》

荒覇吐族とは吾等なり

(前略)世降りて、**倭**より移りきたる民ありて是を**耶馬台族**と曰ふ。亦、破船にて漂着せし民あり。是を阿耶族また久耶漢族の二族ありて、耶馬台族と併合せり。**ホコネ**と称す**稻種**を**東日流大里**に耕作せども、稔豊かならず、飽田、越国へと移りて勢をなし、是を荒覇吐族と曰ふ。(中略)

明治二十年(1885)八月十九日

和田末吉

本誌之原著者 秋田孝季/和田壹岐

和田末吉再筆

原本虫喰亦老朽に依つて再写す 津軽飯詰之住人和田長作蔵す 《八幡書店『東日流外三郡誌1』241～243頁》

【和田家文書群の分類】（古賀試案）

（ α 群）和田末吉書写を中心とする明治写本群。主に「東日流外三郡誌」「東日流内三郡誌」「諸翁聞取帳」が相当する。紙は明治の末頃に流行し始めた機械梳き和紙が主流。

（ β 群）主に末吉の長男、長作による大正・昭和（戦前）写本群。大福帳などの裏紙の再利用が多い。

（ γ 群）戦後作成の模写本（戦後レプリカ）。筆跡調査の結果、書写者は複数。戦後の厚めの紙が多く使用されており、古色処理（灰色・薄茶色）が施されているものがある。展示用として外部に流出したものによく見られる。

（S群）江戸期成立と鑑定された史料。寛政原本など。

